

# 萬葉集卷十六・三八三五番歌の解釈

——遊仙窟との比較を通して——

梅谷 記子

はじめに

万葉集卷十六には、題詞や左注によって作歌事情が伝えられている歌が多い。それらの歌の解釈は、題詞や左注の読み方によって変わるが、次もそのような一首である。

献<sup>カク</sup>新田部親王<sup>ニ</sup>歌<sup>一</sup>一首未詳  
勝間田<sup>カツマタ</sup>之<sup>ノ</sup>池<sup>イケ</sup>者<sup>ハ</sup>我<sup>ワレ</sup>知<sup>ル</sup> 蓮<sup>ハ</sup>無<sup>ク</sup> 然<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>君<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup> 鬢<sup>ヒンナ</sup>無<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>之<sup>トシ</sup>

(卷16・三八三五)

右、或有人問<sup>レ</sup>之曰、新田部親王出<sup>テ</sup>遊<sup>ス</sup>于堵裏<sup>一</sup>  
御<sup>ミ</sup>見<sup>ル</sup>勝間田之池<sup>一</sup>感<sup>シ</sup>緒御心之中<sup>ニ</sup>。還<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>彼  
池<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>忍<sup>ニ</sup>怜<sup>ミ</sup>愛<sup>ス</sup>。於<sup>レ</sup>時語<sup>ニ</sup>婦人<sup>一</sup>曰、今日遊  
行<sup>ル</sup>見<sup>ル</sup>勝間田池<sup>一</sup>。水影<sup>ミヅカゲ</sup>濤<sup>ミ</sup>蓮花<sup>ハ</sup>灼<sup>ク</sup>、何<sup>レ</sup>怜<sup>ミ</sup>断<sup>ル</sup>  
腸<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>言<sup>フ</sup>。尔乃<sup>ハ</sup>婦人<sup>トシテ</sup>作<sup>リ</sup>此<sup>ノ</sup>戯<sup>シ</sup>歌<sup>ヲ</sup>專<sup>ラ</sup>輒<sup>ニ</sup>吟<sup>ミ</sup>詠<sup>ス</sup>也。

(『新校注萬葉集』・平20、五句は私見により改訓)

この歌はわかりにくいとされているが、その原因は次の点にある。第一点が、親王が池に「見」たという蓮を婦人が「ない」という理由が一読しただけでは分からない。第二点が、「鬢無き」としは「蓮無し」を比喻するが、比喻の実態が分かりにくいことである。

第一点については、小島憲之<sup>〔1〕</sup>(昭28)が、当該左注に「遊仙窟の影」をみとめ、同書の「蓮」には「憐・恋」の掛詞や美人の隠喩がしばしばみられることから、親王がいう「蓮」は「憐(恋)」と掛詞であること、婦人の「蓮無し」は「憐(恋)無し」であると説いた。その後、当該歌が「漢籍によって學んだかなり高度の『あそび』である」(小島・昭39)との見解は広く受け入れられるところとなり、蓮の有無が左注と歌とで異なるという分かりにくさは解消された。しかし、この「蓮」が具体的にどのような修

辞であるか、そのことが歌の解釈にどうかかわるかについては説が分かれている。さらに、「鬢無し」は意が確定しておらず、「蓮無し」との関係も明らかではない。

そこで、本稿は、一「蓮」の修辭と実態、二「鬢無し」の意味と「蓮無し」との関係、の二点について、「遊仙窟を利用した高度のあそび」という観点から、左注及び歌詞の問題部分と遊仙窟のこれに相当し参考になる部分の修辭のありようとを比較することによって、一首の解釈を試みたい。

## 一 「蓮」の修辭と実態

### 1 研究史が示す問題点

古い注釈書類は、池に蓮が実在するか否かを問題にしており、実在しないとする説は、十二世紀の『袋草紙』（雑談）が伝える証観法師の「勝間田ニハ無蓮、已虚言也ト読也云々」にはじまり、『仙覚抄』『拾穂抄』『童蒙抄』『代匠記』と続く。蓮が実在するという説は『略解』がはじめである。『略解』は、「婦人の蓮なしと言へるは戯れにて、多く有を、返て無しと言」つたのであつて、あえて事実と反対の事を言うことがこの歌の眼目であるとした。この説は、『古義』、井上『新考』、折口『口訳萬葉集』、鴻巣『全釋』、松岡静雄『続萬葉集論究・有由縁と防人歌』、武田『全註釋』が支持する。

二〇世紀にはいると、「蓮」に隠喩や掛詞を認めるようになり、蓮の有無が異なる理由は納得されたのであるが、具体的な解釈は現在も様々にわかれている。現行の諸説は、「はじめに」で述べたように、小島（昭28）の漢籍の影響下に成った作であるとの見解を基礎とする。しかし、解釈にあたっては、「蓮」が美人の隠喩であるとするものと、「恋」との掛詞であつてその恋の対象は婦人であるとする説とに大別できる。

前者は、『私注』の「實はハチスではなく、そこに棲息して居た娘子など」にはじまり、現在『全歌講義』が支持する。ついで、伊藤博（昭36）や澤瀉『注釋』は、漢籍から広く美人を比喩する「蓮」をあげる。新潮日本古典集成は、「字音の等しい『恋』『憐』を懸けて美女をにおわすらしい」と、掛詞としつつ美女の隠喩として解釈する。近年、山崎かおり（平13）は、左注には特に遊仙窟の影響が強いとして、親王は「遊仙窟」のような体験」を暗示したのであるという。これらの説はすべて、親王の発言意図は、自分が美女と出会つたことにたいする婦人の反応を窺うことであるとするとする。

後者は、小島（昭28）で、「蓮花灼々のうちに親王は婦人へのたはむれの戀を暗にのべた」と、親王が婦人の気を惹いたものとする。日本古典文学大系、日本古典文学全集、

完訳日本の古典、新編日本古典文学全集、多田一臣『全解』  
がこれを探る。

まず、前者は、親王の「美人に出会った」と婦人の「あそこそんな美人はいません」と、一見かみ合っているようであるが、一、二句「勝間田の池は我知る」と第三句「蓮なし」以下とのつながりに疑問がある。この「蓮」は、「池に蓮の有無に就いては問題として取り上げる必要はない」（私注）というように、現実と切り離すべきものである。親王のいう「蓮」は、親王が、美人を隠諭し婦人の反応をみるという意図を付与し、「あつた」と語ることである。婦人は、こういった存在を否定する根拠として、現に池を知っていることをあげたのである。一般的に考えて、文芸的なあそびで池に存在すると主張するものを、現実の池に関する知識があることを以って、無いと主張する直接の根拠とは為し得ないであろう。婦人が池を知っていることは、どのような理由で根拠になっているのであろうか。『私注』は「己の自信を強調する」というが、自信を生む理由については述べていない。『注釋』は「我知る」の言葉も「必要であつた」という。しかし、その必要がどのように満たされているかについて述べてはいない。

これにたいし、後者の小鳥説（昭28）では、勝間田池は親王を隠諭することになる。したがって「我知る」(He

ハヨミヲヨク知ツテマサガ)小鳥)は、三句以下の判断の根拠となりうるのである。「蓮なし」も、当時、恋愛の初期段階には女性がしばしば拒否しており、そういった拒否とみることができる。しかし、本稿は婦人への恋と見ることは疑問を持つ。というのも、左注によれば親王は「還レ自彼池」と、すでに帰宅している。親王が今なお「怜愛」している蓮は遊行先に咲いていたのであり、今、ここにはない。さらに、『全歌譚義』が「婦人の否定の程度は必要以上に強く……皮肉が利きすぎる」というが、筆者も同様の感を抱く。婦人は新田部親王を頂点に頂く「親王家」の秩序内で生活している。さらにこの歌は宅内で人々の前で歌つたものである。「蓮なし」はよいとして、「我知る」とは礼を失しているのではないであろうか。

以上のように、『私注』以降の現行説には、「蓮」を美人の隠諭とみるものと婦人への憐(恋)とみるものとが存するが、いずれの説も「勝間田の池は我知る」と「蓮無し」以下とのつながりの説明に納得しえないものがあつた。そこで、一・二句と三句以下の関係に注目することによって、「蓮」の修辭のあり方が明らかにするという見通しのもとに、私見を述べたい。

## 2 「蓮」の修辭の実態

見てきたように、第一・二句で、婦人はすでに池を知つ

ていることをもって、第三句「蓮無し」以下との判断をしているのであるが、このことから、婦人は、親王の言葉から「蓮」が意味する内容を具体的に把握しており、自分は池にそのようなことがないと知っていると言うものと解してよいと思われる。この場合、「蓮」の典故が漢籍全般に見られるものであれば具体的把握は不可能である。しかし、親王が特定の典故に依つていれば、それと察知することができるであろう。小島（昭39）は、万葉集に遊仙窟の影響が濃厚であることを多数の例をあげて説く。その例の一つが、当該親王の言葉「水影濤々 蓮花灼々、何怜断<sub>レ</sub>腸不可<sub>二</sub>得言<sub>一</sub>」の「蓮」であり、遊仙窟から、「憐」と双関し「恋」を掛ける「蓮」として、三例をあげている。とはいいながら、「蓮」のみであれば、小島も漢籍に多い例であるといっており、親王の言葉の典故が遊仙窟であるとは言いにくい。しかし、橋本達雄（平18）が「何怜」について、漢語熟語として「可怜」は「可憐」のように一般的な文字遣いではないが、最古の写本である醍醐寺本遊仙窟には四例が見え「可憐」がないこと、万葉集にも「可憐」がなく「何怜」「可怜」合せて一三例があることをもって、「万葉集の用字は遊仙窟の影響」であろうという。さらに、山崎（前出）は、同書の「断腸」が、左注のそれと同様、恋の苦痛をいう文脈に多用されているという。これらに加

え、他にも遊仙窟の影響が認められる言葉が見いだせるのであれば、次のように考えられるのではないであろうか。

小島（昭39）は、万葉集の伴田主と石川女郎の贈答をあげ、「自らを中国文學に現はれる名も高い主人公に『あてはめること』（適用 adaptation）を行ふ。これは萬葉歌人の文學手法の一つでもあり、そこに『遊び』があり、フィクション的な戯れがあ」といい、遊仙窟に自らをあてはめた例として松浦河の歌群をあげる。このような例としては、その他に、七夕伝説の世界に入り込んで歌ったもので、例えば巻八の山上憶良の歌群の牽牛や織女になって歌ったものなどをあげることができよう。また、逸文丹後国風土記の浦嶋子伝説にみられる後人追加の第二首は、伝説の浦嶋子になって歌ったものである。これらから、我国の八世紀、伝説や物語の世界に入り込んで歌うことは、文化の一面であったと見てよい。当該歌も、親王が遊仙窟の世界に入り込んだ「あそび」と考えられるのではないであろうか。

そこで、遊仙窟との関わりを思わせる言葉として、従来の指摘以外に「水影濤々 蓮花灼々」の「水」に注目したい。「水影濤々」「蓮花灼々」は池の景を述べる一対の表現で、親王の言葉の中心をなしている。ところが、従来の理解においては「蓮」だけが掛詞あるいは比喩として取り上

げられ、対句を構成する上では同じく「水」も重要であるにもかかわらず、掛詞としても比喩としても検討されることはなかった。これまで「水影濤々」は、波打つ水面が蓮の美しさを引ききたてる背景としてのみ理解されてきたといえる。確かに、遊仙窟で「水」という語は、「蓮」と関連して使用されている場合、水が蓮を生やし育てる、水が豊かにあるところでは蓮が見事に咲く、水により蓮花は美しさが引き立つ、という文脈に見出される。しかし、「水」はそのように「蓮」を引き立てるだけにとどまらず、掛詞としても用いられている場合がある。その例をあげると、

①十娘曰ハク、児等並ビニ無シレ可キコトニ収メ採ル。少府公云フ 冬ノ天ニ出ダシレ柳ヲ 旱ノ地ニ生ズトレ蓮ヲ 総テ是レ相弄フル也ト。

②下官答ヘテ曰ハク 十娘ノ面上非ザルニレ春ニ 翻テ生ズニ柳葉ヲ。

③十娘應ジテレ聲ニ答テ曰ハク 少府頭中ニ有レバレ水 何ソ不ラントレ生ゼニ蓮華ヲ

④下官笑ヒテ曰ハク 十娘ノ譏警 異同著ケリトレ使ニ  
(本文のみ無刊記本43ウ)

がある。④にみえる「譏警」は、同書で他にもう一例、

于レ時 五嫂遂向ニ菓子上ニ 作ニ譏警ニ曰 但問ニ意如何ニ 相知不レ在レ棗 十娘曰 児今正意密 不レ忍ニ

即分裂一

(本文のみ無刊記本37ウ)

がみえる。「機(引用本文の譏は同音による通用)警」は「機敏警覚」の意味だが、洒落の意味にしばしばつかわれた(今村与志雄訳・遊仙窟・岩波文庫、後例の注)もので、五嫂の例、④の例、ともに同音異義語を掛けることとみてよい。②③については、成瀬哲夫『遊仙窟』(平17)が、同音異義語の観点から、②「柳」が「別れ難い意味を表す留と同音」、③「水」は「誰」と同音、「蓮」は「恋」と同音という掛詞がある、と指摘している。

これによつて、①④の文章を、掛詞に注意しつつ、物語にそつて展開をたどると、①では、先に文成が舞いながら十娘を讃えて作った詩から、十娘は「冬天出レ柳 旱地生レ蓮」を引用し、私への賛辞はひやかしです、文成には実意がない、と身を引いて見せたのである。②では、①を受けて文成が「柳の葉のような眉ですね。(貴女は私と別れ難い思いですね)」と押したのである。③では、十娘が「張さまの頭の中には水があるのですから、どうして蓮花が生じないでしょうか、生じますわ。(頭のなかに誰かを想っているのですから、どうして恋花が生じないでしょうか、生じますわ。)」と、私を想つて情熱的になるはず、と煽つたと解され、いずれも掛詞によつて、恋の進展が語られていたのである。

このような掛詞の技法が、我が国の八世紀前半、人々の間で盛んに受け入れられ応用されたことは、先述の小島氏ら先学によってすでに明らかにされている。遊仙窟の掛詞と卷十六の關係も、当該歌の前の三八三四「成棗寸三三粟嗣」の「成棗」が、引用の五嫂の「棗」と「早」、十娘の「梨」と「離」を踏まえるとの指摘がなされている（土橋寛・昭27）。当時の人々は遊仙窟中の掛詞を知悉しており、親王の念頭には、引用の③にみられる、「蓮」と「恋」の掛詞と共に「水」と「誰」の掛詞も存したとみてよいであろう。もちろんこれを聞く婦人もよく知っており、すぐにそれと察知したと思われる。

親王の言葉は、表面の意味が「勝間田の池は水が輝いて、蓮が咲きほこっている。可愛らしさは言葉にならない」であり、同音異義語による意は「誰かさんが居たものだから、恋の花が鮮やかに咲いた。可愛いさは腸が千切れて言い表すことができないのだ」である。その「誰か」とは遊仙窟の十娘その人であろう。親王は、遊仙窟の十娘と素晴らしい恋を体験したのだ、と匂わせたのである。親王の意図は、婦人がどの程度遊仙窟を理解し、自分が働きかける「あそび」にどのように応えるか、知識・機転、作歌の技量などの知的能力を試すことであつたと考えられる。

ただ、気になることは、婦人の歌に「水（誰）」が読み

込まれていないことである。ここは、親王の言葉に忠実に対応し「勝間田の池は水無し（十娘はいません）、蓮なし（憐は有りません）、……」とも言えるところである。しかし、その場合、歌として意は通るのであるが、遊仙窟を典拠にし、該当箇所意を利用するという観点からみると、親王が掛詞「水」「蓮」の典拠とした箇所を引きつけられざるを得ず、自己の典拠の意を活かすことは困難となる。婦人が歌の「蓮」に掛けている同音異義語は、「憐」に違いないのであるが、次節に述べるように、親王とは異なる箇所を典拠とする。婦人は、自己の基づく典拠が聞く人に明瞭に察知でき、その意が歌に活かされるように、「水」にはふれなかつたと思われる。「我知る」は、十娘がいるはずのない場所と認知していることを言うものとみられる。というのも、遊仙窟の末尾、文成は十娘の許を去つた後、二度と会うことができず、歎きの詩を作る。その一節によれば、「思<sub>レ</sub>神仙<sub>一</sub>兮 不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得 覓<sub>二</sub>十娘<sub>一</sub>兮 断<sub>二</sub>知聞<sub>一</sub>」（無刊記本64才）と、仙窟の所在は分かつたが、十娘の行方は全く知れないのである。「我知る」は、「勝間田の池は、私、知っています。（あの場所に文成が訪れた仙窟は無く、誰も行方を知ることができない十娘はいないと私知っています。）」と解されるのである。

## 二 「鬢無」の意味と「蓮無」との関係

### 1 研究史が示す問題点

では、「鬢無」は如何であろうか。「鬢」は古来ヒゲと読まれ、もっぱら親王のヒゲの有無が論じられてきた。それは現在も同様である。有るとする説は、証観法師の「如レ歌ハ、彼親王以外大髭也。是ハ汝ヲ無レ髭人ト如レ云也」が古い。事実と反対に表現することに「戯れ」を見るもので、「仙覚抄」「略解」「古義」・井上「新考」・「口訳萬葉集」・鴻巣「全釋」・松岡静雄「続萬葉集論究」・有由縁と防人歌」・『総釋』（高木市之助担当）・武田「全註釋」・日本古典文学全集（小学館）・完訳日本の古典（小学館）・新編日本古典文学全集（小学館）・新日本古典文学大系（岩波書店）と、現在まで多くが支持する。

一方、ヒゲが無いとする説は、古くにも一般的認識として存したようであるが（袋草紙）、比喩のありかたも考慮する論としては『代匠記』の「君ノ鬚オハシマスヘキ御顔ニ、ナキカ如ニテ候ト戯タルナリ」がはじめである。親王のヒゲが無いことをあげつらうこと自体に「戯れ」をみるもので、『萬葉考』・本居宣長（問聞抄）・窪田「評釋」・『私注』・小島（昭39、昭28では有ると見る。）・伊藤（昭36、『釈注』〈平10〉では有鬚の可能性を認め、結論は「読者に

お任せしたい」という。）・澤瀉『注釋』・多田一臣『全解』が支持する。

なお、ヒゲの有無について、日本古典文学大系、『全歌講義』は判断を保留する。中西進『全訳注・原文付』、新潮日本古典集成は言及しない。

以上のように、ヒゲに言及する説は保留以外すべて、親王のヒゲが現実には有るか無いかを重視しており、身体的特徴を比喩に用いたことに「戯れ」を見る。親王は臨席しているのだからヒゲの有無は誰にも明白で、婦人の謂いの黒白が気になるところではあるが、その事実のみ関心が集まり、婦人が「鬢」という語を取り上げる理由が顧慮されていないことに未解決の問題が潜んでいるのではないかと思われる。

親王の言葉、歌、ともに「かなり高度の『あそび』である」（小島・昭39）ことを思えば、第四・五句は「従属的」（伊藤博・昭36）ではなく、婦人は、三・四・五句に重点を置いたと思われる。いうまでもなく万葉集には二句で切れる歌が多く、それらでは第三句以下に表現の中心がある。このことからしても、第三句の「蓮」と共に第五句の「鬢」をも、婦人は「あそび」の中心として取り上げたのではないであろうかと考えられる。すなわち、第一節に見たところ、左注と歌の第三句までには和語を漢語におきかえると、

漢語の同音異義語の掛詞が一つならず影響を与えていることが確認できたのであった。すると「鬢無」にもこのような掛詞を用いた表現法が用いられている可能性はあろう。そこで以下、「鬢」について、和語と漢語にわたる掛詞としての可能性を検討するが、その際、文字の異同および読みにも注意したい。

## 2 「鬢」の文字異同

ここでまず伝本における鬢の異同を確認しておきたい。それというのも、従来この文字については指摘されていないが、私見では掛詞の機能を担う可能性があり、掛詞の成否は文字によつて左右されるからである。さらには、左注に婦人がこの歌を「吟詠」したとあり、親王はじめ同席の人々は、耳から入る歌の言葉によつて、掛けられている文字を特定したであろうことも考慮しなければならない。伝本による文字の異同は、校本『萬葉集』によると、「鬢」が、尼崎本・類聚古集・古葉略類聚鈔・紀州本・神宮文庫本・細井本・大矢本・近衛本・活字無訓版本である。「鬢」が、西本願寺本・京大本であり、「鬢」が広瀬本・陽明本・温故堂本である。訓は、「鬢」・「鬢」いずれも、すべて「ヒゲ」である。

注釈類がこれらのいずれをとるかをみると、ここでも「鬢」と「鬢」に分かれる。「鬢」をとる説は、仙覚抄・

『童蒙抄』・井上『新考』・松岡静雄・窪田『評釋』・日本古典全書・武田『全註釋』・澤瀉『注釋』・日本古典文学全集・後藤利雄(昭和55・ピンと読む)・完訳日本の古典・新編日本古典文学全集・山崎かおり(前出、ピンと読む)・新日本古典文学大系である。「鬢」をとる説は、証観法師(鬢を当てる)・拾穂抄(鬢を当てる)・代匠記・『萬葉考』・本居宣長(問閑抄)・略解・『古義』・折口『口訳萬葉集』・鴻巣『全釋』・『總釋』(高木市之助担当)・『私注』・小島憲之・伊藤博・日本古典文学大系・日本古典集成・中西進『全訳注・原文付』・多田一臣『全解』・阿蘇瑞枝『全歌講義』である。

見てきたように、伝本は古写本を中心に鬢をとる説が多く、鬢が元の文字である可能性が高いと思われる。にもかかわらず注釈類は、「鬢」をとる説が多い。その理由はヒゲという訓にある。『代匠記』は

和名云。説文三云。鬢ハ卑吝反頰ノ髮也。カ、レハ俗ニ保保比ヒゲト云物ニヤ。但(前)和名ヲ出サス、又美人ヲホルムニ蟬鬢ナト云ヒ、常ニモ音ニ云ナルハ、髮ノ耳ノ前ニ生ヒサカリタルヲ云ハハ、頰髮ト注セルモソレニヤ。(然レ)(若)ハ鬢ノ字ノ誤歟。(説文ニ、鬢髻ハ頰ノ下ノ毛ナリ也ト注シテ、和名之モ豆ヒゲナレト)

(精撰本)



と、「鬢」が常に音読みされ、「和名ヲ出サス」であることを重視し、鬢は鬚を誤つたものと判断している。『萬葉考』も「今本、鬚を鬢ヒゲに誤る。訓によつて改む」という。鴻巣『全釋』・日本古典文学大系は、ヒゲと訓じることを前提に、西本願寺本を選択するという。しかし、西本願寺本が存在するとはいへ、多くの写本が鬢であるところを、訓によつて本文の文字を選択することは原則的に本末転倒ではないであろうか。

とはいうものの、確かに「鬢」は漢語としては一般的に「ヒゲ」そのものではない。にもかかわらず、先に見たように、伝本類で「鬢」とある諸本も「ヒゲ」という訓を付していたことが注意される。では、近代以降、「鬢」をとる説はヒゲと訓じることとをどのように説明しているのだろうか。これを詳述するものは、澤瀉『注釋』と、新日本古典文学大系である。

「鬢乃剃ヒゲ」(三八四六)とあるから、説文(九上)に「類髪也」とあり、類鬚の意でヒゲと訓んでよい。

〔注釋〕

原文「鬢」は普通は耳のそばの髪を言う。日本書紀に、古人大兄が「髻ヒゲ(ひげ)を剔除(そ)りて袈裟(けさ)を披着(き)つ(孝徳天皇即位前紀)と、大海人皇子が「鬢ヒゲ(ひげかみ)を剃除(そ)りたまひて、

沙門(ほふし)と為(な)りたまふ(天智一〇年)という類似の記事がある。「鬢」は髻(ほおひげ)に当たる。「鬢 ツラノカミ・ホノカミ」(名義抄)

(新日本古典文学大系・脚注)

『注釋』のあげる三八四六の「鬢」の訓がヒゲであることは、当該訓をヒゲとする確実な根拠とはなりえない。なぜなら、万葉集に訓が付された時期は、最初が一〇世紀の中葉であり、作業に携わつた梨壺の五人の一人である源順の『倭名類聚鈔』の「鬢」には、後に引用するように、ヒゲという訓がない。当該訓と三八四六の訓が揃つて動く可能性が存するからである。

新日本古典文学大系は、日本書紀の「剔除髻髮」「剃除鬢髮」において、「髻」と「鬢」は、同意を表現する同構造文の相等位置にあるというが、それゆえ語の意味が同じであるとは限らない。さらに、髻と鬢の訓を比較して義の重なりを推測し、鬢をヒゲと訓じることについては、つぎのように考える。『類聚名義抄』(観智院本)には

髻 如占切 頰毛 ヒゲ シモツヒケ ホ、カミ

(佛下本三六)

と、ヒケ ホ、カミがみられ、鬢の「ホノカミ」(名義抄・観智院本)と重なつており、ために髻の訓ヒケを鬢に持ち込めるようにみえる。しかし、『釋名』(釋形體第八)

は髻と鬢を次のように説明する。

- ①在頬耳旁曰髻隨口動搖髻髻然也②其上連髮曰鬢……③  
鬢曲頭曰距距矩也

①髻は、「頬」にある毛のうち、口の動きに連動して揺れ動くものである。②鬢は髻の上部につらなっている髪である。③鬢の形状は、曲がり、その先端を正面から見ると、蹴爪のような形に尖っているのである。これらから、顔の側面にある人毛のうち、髻は下に垂れて動くもので、鬢は結髪して頭頂部にゆくものと判断される。『類聚名義抄』（観智院本）の髻の説明が、「頬毛」と「髪」ではないこと、訓にシモツヒケとあること、『類聚名義抄』（観智院本）

髻 音擯俗云本音濁 和音鼻ン ツラノカミ ホノ

カミ (佛本下三八)

と、ヒケという訓がないこと、こういう点が髻と鬢の義の違いとして了解される。鬢をヒゲと訓じることができないのである。

かくして、あたかも鬢が誤写で鬢が本来であるかのように感じられるのであるが、訓が本文に先行して存在しているわけではない。まして、婦人の言葉がヒゲであったと断じることができない。むしろ、婦人がヒゲと言ったのであれば、万葉集のヒゲが、当該訓と三八四六以外は、「比宜」（八九二）・「之良比氣」（四四〇八）と音仮名表記であるこ

と、『類聚名義抄』（観智院本）にヒケの訓を持つ文字が

髻（カミツヒケ・ヒケ）、鬢（ヒケ・左旁に濁点）、髻（前出）

といくつかあることを参考にすると、耳からヒゲと聞いたのであれば、文字の特定が可能であったかという疑問を持つ。

そこで本稿は、古写本を中心に「鬢」が多いことを重視し、鬢を本文とし、この文字について、字書を参考に訓を定め、遊仙窟中の用字から同音意義語と認めえるもの存在を確認したい。

### 3 鬢（びん）と懸（びん）

我が国の古字書は 鬢をつぎのように説明する。

『篆隸萬象名義』 鬢 卑吝反 類髮

『新撰字鏡』（天治本） 鬢 卑吝反 類髮也

『倭名類聚抄』（二〇巻本） 鬢髮 説文云 鬢 卑吝反 類髮也

『類聚名義抄』（観智院本） 鬢 音擯俗云本音濁 和音鼻ン ツラノカミ ホノカミ

反切の「卑」は、軽唇清音「非」母に属しており、ヒと清音である。ところが、『類聚名義抄』（観智院本）が「元の音は濁っていた」との俗伝をあげ、和音はピンとしている。『類聚名義抄』（観智院本）の和音注は、（平安時代の学問

僧や学者が)「古く傳つた呉音は呉音と呼はずに『和音』として區別しようとした」もので、「大体に於いては、名義抄の和音は法華経など佛家傳承の呉音と同一」(吉田金彦 昭和26)とされる。正音はヒンと認識されていたが、久しく以前に伝来したピンが定着し、和音といわれていた。

「鬢」の義は、各字書に「頰(頬)髪」とあり、実態は『釋名』の解説通りに理解されていた。倭名が無いようであるが、「鬢(びん)」のまま日本語に定着しているからである。このような語はいろいろな分野にみられるが、山田孝雄(『国語の中に於ける漢語の研究』・昭15)によると、「人體の局所」の名称があり、「倭名鈔を見るに、人の體形をいへる部のうち、頭面、耳目、鼻口、毛髮、身體、肌肉、臟腑、手足等をいへるものが絶待多數」である。実際、平安朝のかな文学にも「鬢」は、落窪物語に「(蔵人の少将が帯刀を召し寄せたのは)御鬢まゐらせ給はんとてなりけり。……御鬢かきはてて入り給ふ……」(巻一・古典大系、八二頁)、枕草子「(七月頃)朝ぼらけのいみじう霧りたちたるに、……鬢のすこしふくだみたれば、烏帽子のおし入れたるけしきも、しどけなく見ゆ」(三卷本・三四段)、と生活に溶け込んだ日本語になっている。貴族社会で男性は鬢を髪と共に上に梳きあげ結髪しており、男性の美しさのポイントでもあった。

新田部親王は、父が天武天皇、母が藤原鎌足の娘五百重娘という有力皇子で、最終的に一品に叙せられている。出家していれば記録が残されているはずであるが、そのような記録は見当たらない<sup>15)</sup>。親王の鬢は、量に多少はあっても頭頂部に結いあげられていたと思われるのであり、当該訓は「びん」とすることが妥当である<sup>16)</sup>と考える。

婦人がその鬢(びん)を「無い」と歌えば、人々は「蓮無し」に加えてここにも掛詞を看取したことと思われる。当該歌の和語「はちす」に対応する漢字は「蓮」であり、外来和語「びん」に対応する漢字は「鬢」である。ところが、遊仙窟には、「蓮」はもちろん掛詞である「憐・恋」と「鬢」との組合せで、典拠の可能性のあるものは見当たらない。そこで「鬢」以外の文字で、鬢の漢音ヒンと和音ピンと同音であるものと、「蓮・憐・恋」との組合せを見る。ここで遊仙窟という漢籍に典拠を求めるに際し、和音を考慮に入れることについて触れておく。半谷芳文(『懐風藻』押韻考)・『和漢比較文学』49号・平24)は、『懐風藻』の押韻で、従来、破格とされてきたものは「韻書を使用せず、日本漢字音によつて押韻した」ものであるという。当時最も權威を認められていた漢詩集に和音が許容されていることから推して、当該歌のように、掛詞を漢語と和語の両方に渡らせて作歌するような場合には、和音

も対象にすることが許容されたとみてよいであろう。まずピンという音の文字では、「蓮・憐・恋」と組合せて典拠と見られるものはない。ところが、ピンの場合、「憐愍」という熟語が、つぎのように使用されている。

下官斂<sup>テ</sup>手ヲ而答<sup>ヘテ</sup>曰ク 向來惶惑<sup>シ</sup>實<sup>ニ</sup>畏<sup>レテ</sup>參差<sup>タリ</sup>。

十娘憐<sup>ニ</sup>愍<sup>シ</sup>客人<sup>ヲ</sup>存<sup>セシ</sup>メバ<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>死命<sup>ヲ</sup>可<sup>シト</sup>レ<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>ニ

白骨<sup>再</sup>ビ<sup>穴</sup>ツキ<sup>枯</sup>樹<sup>重</sup>ネ<sup>テ</sup>花<sup>サ</sup>クト<sup>一</sup> 伏<sup>シテ</sup>レ<sup>地</sup>ニ<sup>叩</sup>キ<sup>レ</sup>頭<sup>ヲ</sup>

慙<sup>歎</sup>ニ<sup>死</sup>罪<sup>ナリト</sup>イフ (本文のみ無刊記本・53才)

『広韻』によると「愍」の反切は「眉殞切」、眉は「薇」と同音、「薇」は「微」と同音、「微」は唇音清濁である。

周知のように、隋唐時代の長安地方の方言は鼻音声母の非鼻音化現象がおきており、これらmの音はmbの音に変化しているとされる。このような長安地方の音が我が国に漢音として伝来した時期について、藤堂明保は、日本書紀の万葉仮名が漢音式の読み方であること、持統五年（六九一）九月四日に、「音博士大唐續守言」の記事が見えることから「七世紀の末から八世紀にかけて」とする。確かに、日本書紀には、愍の反切上字「眉」が「舊稜威之雄誥（雄誥、此云鳴多稽眉）」（神代紀上第六段）と、<sup>(1)</sup>びを表記している。遊仙窟は当時の長安で流行していた、現代小説<sup>(2)</sup>である。当該「憐愍」はレンピンと読まれたと考えてよい。

この「憐愍」は同義の二字を重ねて「いとおしむ」こと

であるが、遊仙窟の筋書きに即すると、十娘が文成を愛して受け容れることである。婦人はこの憐愍に着眼し、「勝間田の池は十娘がいないと私知っていますわ。十娘の「憐愍」はありません」という趣旨で、「蓮（憐）無し」「鬢（愍）無し」と歌ったと考えられる。

この個所は詩ではないが、万葉集では遊仙窟の地の文も、多く典拠にされており、<sup>(3)</sup>「十娘憐愍客人 存其死命」は、同書中の恋愛表現として当時の人々によく知られていたとみてよい。

しかし、遊仙窟の注釈類に、この「愍」が「鬢」を連想させることに言及したものはない。逆の「鬢」が「愍」を連想させることに言及したものもない。さらに、上代文学の先学によつても、同様の指摘がなされていることはない。そのような状況ではあるが、遊仙窟のこの個所に注意すると、当該歌における「鬢」は「愍」の掛詞として婦人が用いたと思われる。「専輒吟詠」とあるところを見れば、何か繰り返して詠じたようである。この掛詞は、おそらく音の組合せからみて、すでに一般的に認知を得ているというようなものではなく、婦人独自の着想であるために、親王はじめ人々が気付き難く、了解されるまで少し時間を要したものであろう。婦人は親王が働きかけた「あそび」をよく理解し、自らも遊仙窟の「憐愍」を典拠として掛詞を

案出し、歌に応用したと考えられるのである。

### おわりに

以上、三八三五番歌については、「蓮無」と「鬢無」の二点の理解に問題があるとみて、縷々と考察を加えた。すなわち、「蓮無」については、現在、「蓮無し」は美人の隠喩あるいは同音異義語の「憐・恋（レン）」を掛けているとされているが、そのような修辭が使われていることが、歌の解釈にどのように影響するものか、いまひとつ曖昧に思われたのであり、「ヒゲ無し」も、言うことの実態や比喩のありかたが明確にはされていなかったのである。そこでこれらについて検討し、「鬢」はピンと読み、遊仙窟を利用した「あそび」つまり掛詞があるのではないかという想定のもとに、同書との比較をおこなった。その結果、左注の親王の言葉には、従来指摘される「蓮・憐・恋」の他に、「水」には「誰」が掛けられており、歌には、遊仙窟の「憐愍」を典拠に、第三句に「蓮（レン）」と「憐」が、第五句に「鬢」と「愍」が掛けられていることを指摘した。これによって、当該歌の、親王の言葉は、表面上の意が「勝間田の池には水がきらきらして、蓮花が美しく、愛らしさは腸が千切れ、言葉にならない。」であり、掛詞によると「勝間田の池には誰かさん（十娘）が居て、恋の花が

咲いた。可愛らしさは腸が千切れ、言葉にならない。」と、十娘と恋をしたと語っていると理解されること、歌は、親王が体験したという十娘との恋を否定することに重点を置き、「勝間田の池は（あそこに十娘はいないと）私知っています。ですから蓮はありましても『蓮（憐）』はありません。十娘と恋をしたとおっしゃる親王様の鬢はありましても『鬢（愍）』がないようなものです、十娘の憐愍なしです。」と作歌したと理解するべきであるとの結論に至った。

これまでこうした理解に至らなかったのは、婦人が答歌を詠んだ時、漢籍を典拠に和語で同音異義語を歌うには、実景であるところの池に蓮があることと、同じく実際には親王に鬢があることは、それぞれに親王の言葉と皆が眼前に見えて明らかであることにまかせて、前提として表外に置く他は無かったと思われるのであり、そのことが後世の理解に困難をもたらしたことによるものであろう。しかし、歌意はここに示したように解すべきものと思われる。

注

- (1) 「万葉人の庖厨に漢籍あり」『国語国文』227号 昭和28年  
 『上代日本文學と中国文學』中、第五篇第七章・遊仙窟の投げた影 塙書房 昭和39年
- (2) 「蓮」に女性を想像することは、窪田『評釋』が先にふれているが、左注を後の作として全く信を置いていない。
- (3) 「はちすー戲笑歌の一解釋」『萬葉』38号 昭和36年  
 『萬葉集の表現と方法上』古代和歌史研究5（第四章・万葉歌の場と表現、第三節・戲笑の歌）塙書房に収録。
- (4) 「蓮と鬢—万葉集卷十六・三三三五番歌の解釋—」『国学院大学大学院紀要（文学研究科）』32号・平成13年
- (5) 『萬葉集の編纂と形成』（493～495頁）笠間叢書369、「何怜」の何は可の誤りとみる。
- (6) 井手至『遊文祿』萬葉篇一、371頁に小島と共同執筆で同旨を述べる（初出、昭39）。
- (7) 『中国古典小説選』4 明治書院
- (8) 「遊仙窟と萬葉集—三三三四の歌について—」『萬葉』3号 昭和27年
- (9) 有鬢説のなかでも、証観法師、『仙覚抄』『拾穂抄』・『童蒙抄』は、比喩のありようが他と異なっており、こゝには除く。
- (10) 諸説は句切れについてほとんど言及していない。ただ、伊藤（昭36）のみが「一首の表現の中心は、どこまで

- も『勝間田の池は我知る蓮無し』と自信たつぷりに否定した上の句にある。」と三句切れに解している。
- (11) 後藤利雄「鬢と鬘と檀越と—万葉集卷十六の歌三首について—」『国語と国文学』57巻 昭和55年
- (12) 中華書局一九八五年出版。『釋名疏證』によって校訂が加わる以前のものには、鬢の解説が二か所みられる。「鬢峻也」は、畢沅の校により「顛峻也」とされた。
- (13) 「類聚名義抄にみえる和音注について」『国語学』6・昭和26年
- (14) 松下貞三『漢語受容史の研究』和泉書院・昭和62年
- (15) 山崎（平13）は鬢と訓じるが、髪と同意とし、「鬢無し」とは禿頭のことであるとす。しかし、鬢は髪と異なるものである。さらに、禿頭の論拠とすべく今昔物語からあげている二話も、当時禿頭が見苦しいとされていたことを背景に、当人たちの反発を語るものである。当該歌解釈の根拠とするには困難があると考えられる。
- (16) 三三四の鬢も「びん」と訓じるべきである。池原陽齊『萬葉集』卷十六・三三四六番歌の訓読と解釈—「馬繫」と「半甘」を中心に—（『上代文学』110号・平25）は、工藤力男の馬繫は薬草「狼牙」とする説をとる。「ひげの剃りのこしは、まるでウマツナギだ」とする。池原論文は「鬢」を「ひげ」と訓じるが、「びん」と訓じると、「莖に直立して開出毛ある」様子が、剃った後の毛が伸びかけた縦に長い揉上を連想させて、より相応しいであろう。とはいえ、法師は鬢が無いので

あるからヒゲと区別はつかず、訓を「ひげ」として意は通じる。中世の『音訓篇立』（古典研究会編『古辞書音義集成』汲古書院）に、「鬢 ヒン云 ヒケ タレカ ミ ツラノカミ」ナリ（地中・第九）とあり、ヒゲはこれなどが根拠となつていのではないであらうか。

(17) 藤堂明保『漢語と日本語』・第二章日本の漢字音 秀英出版 昭和44年

沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』・第三部第一章四項 平成9年

(18) 注1の小島（昭39）、佐竹昭廣「獨りのみきぬる衣の」『萬葉』一号・昭和26年、『中西進萬葉論集』第二卷四章 戯歌・五 戯笑歌・平成7年、注7の橋本達雄

『遊仙窟』は、本文を『江戸初期無刊記本 遊仙窟』（蔵中進編・和泉書院・昭54）による。訓読は、『醍醐寺本遊仙窟総索引』（古典籍索引叢書・汲古書院・平7）、『遊仙窟全講』（八木沢元・明治書院・昭42）、『遊仙窟』（今村与志雄訳・岩波文庫・平1）、『中国古典選書4 遊仙窟』（成瀬哲生・明治書院・平17）を参照し、私に行った。

\* 稿を成すにあたり、多くの先生方にご指導を賜りました。心からお礼申しあげます。

## 『上代文学』投稿規程

- 2 1 投稿者は会員に限る。
- 2 1 投稿論文は原則として縦書きとし、分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内（注をも含む）とする。
- 3 ワープロ原稿の場合には、原則として縦書き、一行四十字に設定し、分量は四百行以内（注をも含む）とする。
- 4 投稿論文は、原本を手許におき、コピー五部を送る。
- 4 投稿論文の表紙には、投稿者の住所および勤務先（学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年）を記載する。氏名にはその読みをかなで書き加える。
- 6 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 6 投稿論文の締切は、六月十五日、十一月三十日の年二度とする。
- 7 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合がある。
- 8 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定し、その結果を通知する。
- 9 投稿論文（コピー五部）は返却しない。
- 11 10 「上代文学」に掲載された論文等の著作権は執筆者に帰属する。ただし、発行から五年を経過した分については、特に申し出がない限り、上代文学会の責任において順次電子化公開する。
- 12 翻刻・影印などを含む論文等については、「上代文学」への投稿に際し予め所蔵者から電子化公開の許可を得ておくこと。許可が得られない場合も投稿を妨げないが、その旨を原稿の末尾に明記するとともに、非公開とする箇所を明示すること。